

# 教師－児童関係が学級経営に及ぼす影響に関する質問紙調査

山田雅彦（東京学芸大学）

## I. 課題と問題意識

本発表の課題は、小学校における教師－児童関係のあり方が学級内の児童相互間の関係に及ぼしている影響を明らかにすることにある。あらかじめ結論を述べるなら、学級内の児童間の仲の良さや互助的・自治的活動は、教師と児童の間の水平関係（仲の良さ、心情的なつながり）よりも上下関係（生活規律・学習規律の確立）から、より大きな影響を受けている可能性が示された。

学級経営に関しては、教師と児童・生徒の間の立場の違いをわきまえた学級内ルールの徹底（上下関係）と、立場にとらわれない心情的なつながり（水平関係）が二大原則であるが、いずれを優先するべきかについて、いずれか一方を重視する論が併存してきた。1980年代をピークに「管理教育」をめぐる対立が顕在化していたが、1990年代後半には「カウンセリングマインド」をキーワードとする水平関係が行政によって推奨され、同時期に社会問題化し始めた「学級がうまく機能しない状況（いわゆる学級崩壊）」をうけて、2000年代に入ると再び上下関係の重要性が指摘されている。しかし、上下関係を水平関係に優先させることの一般的な有効性が説得力ある形で示された例は確認できない。上下関係を優先する教師の中にさえそのことへの後ろめたさを表明する者がいる。根拠が曖昧なまま両論が併存している状況の内において、効果的な学級経営のための上下関係と水平関係の適切なあり方について精査することは今なお重要な課題であり続けている。

## II. 研究の方法

### 1. 質問紙調査

内容：①Q1-1～20 森田・山田（2013）が横藤の「縦糸・横糸チェックリスト（野中・横藤 2011 17）」をもとに作成した学級経営傾向自己評価シート。②学級経営のスタイルに影響を及ぼす可能性のある教師及び学級の属性。具体的には、Q2-1①に回答する際にふりかえった学級（現在または最後に担任した学級）の学年、Q2-2 その学級の人数(人)、Q2-3 その学級を担任した時期（○年前）、Q2-4 その学級の学級経営の順調さ、Q2-5 その学級を担任した時点での通算勤務年数(○年)、を調査内容とした。

用紙及び回答方法：調査用紙には無記名式を用い、回答方法は①についてはすべての項目で4件法（「4.いつもそうである」－「1.全くそうではない」）を採用した。

実施日時及び協力者：2015年7月に、公立小学校の校長に協力を依頼し、了解が得られた学校に質問紙と返信用封筒を送付、学校単位で実施、返送してもらった。回答は任意とした。32校427人の回答が得られた。学校側から伝えられた必要な質問紙の枚数を母数とする回収率は76.5%であった。これらのうち、回答に欠損が認められたものを除外した395人(83.2%)を分析の対象とした。

### 2. 分析方法と結果

#### (1) 因子の抽出

因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行い、2因子を抽出した。第1因子( $\alpha = .81$ 、10項目)を「上下関係因子」、第2因子( $\alpha = .71$ 、5項目)を「水平関係因子」と命名した。累積寄与率は33.39%、因子間相関は.58となった。

## (2) 児童間関係への影響

教師が学級経営の順調さを評価する目安として、教師-児童間の上下関係や水平関係よりも、児童相互間の関係のほうが重視されている可能性を確認した上で、その児童間の関係に教師がいかんして影響を及ぼしうるかを追究した。

水平関係因子から除外された5項目のうち4項目、Q1-3「子供は発言するとき、教師だけに話している」Q1-4「明るい笑いがあり、暗いわらいはない」Q1-9「友達ができない時や失敗した時に助け合う」Q1-19「グループで仲良く学習を進めて

いる」は児童相互間の関係を問うものである。これら4項目をそれぞれ目的変数、教師と学級の属性、上下関係・水平関係両因子を説明変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。除外された4項目相互間で、一部にやや高い相関係数( $r = .36 \sim .37$ ,  $p < .001$ )が認められたため、除外された項目をそれぞれ他の項目の説明変数に加えた。VIFは1.03~1.67、許容度は0.60~0.93で、説明変数間の多重共線性の問題はないと判断された。

4項目すべてと上下関係因子との間に有意な正の関連が認められた。一方、水平関係因子との間にも、Q1-4、9、19の3項目について有意な正の関連が認められた。いずれの標準偏回帰係数も上下関係因子とのそれに比べて低い絶対値にとどまった。また、上下関係因子の標準偏回帰係数は、常に同じ独立変数に対する他の説明変数と比べて最も高い絶対値を示した(表1)。このことから、児童間の仲の良さや互助的・自治的な関係には、教師と児童との水平関係よりも上下関係が強く影響している可能性が示された。

## 文献

- ・野中信行・横藤雅人 2011 『必ずクラスがまとまる教師の成功術!学級を安定させる縦糸・横糸の関係づくり』学陽書房。
- ・森田純・山田雅彦 2013 「学級経営に影響を及ぼす教師-児童関係に関する質問紙調査」東京学芸大学 教育学講座 学校教育学分野・生涯教育学分野『教育学研究年報』32、23-37。

## 謝辞

質問紙調査にご協力くださった皆様に厚く御礼申し上げます。

表1 児童間関係を問う項目を目的変数とする重回帰分析結果

	Q1-3 発言	Q1-4 わらい	Q1-9 助け合い	Q1-19 グループで学習
Q1-3	—			.10 *
Q1-4		—	.13 **	
Q1-9		.17 **	—	.14 **
Q1-19	.14 **		.13 *	—
Q2-1 学年		-.16 ***		.17 ***
Q2-3 担任時期	.12 *		-.16 ***	
Q2-5 勤務年数			.10 *	
上下関係因子	.17 **	.21 ***	.28 ***	.27 ***
水平関係因子		.15 **	.20 ***	.18 ***
自由度修正済み R <sup>2</sup>	.10 ***	.20 ***	.29 ***	.29 ***

注 値は標準偏回帰係数( $\beta$ )

\*:P<.05, \*\*:P<.01, \*\*\*:P<.001